

市内史跡探訪レポート

二〇一五年八月十日

別府文学散歩コース

矢 島 嗣 久

1 JR別府駅

明治四十四年（一九一三）七月、亀川駅と別府駅が開通、北九州、小倉方面のお客が来別。福岡県飯塚の炭鉱王が山の手に別荘を建てた。麻生太吉（麻生太郎副総理の曾祖父）、伊藤傳右衛門（白蓮事件）、佐藤慶太郎（石炭の商売）、野口病院、野口雄三郎初代院長、現在は四代目の院長。

2 市電電車と森鷗外

明治三十三年（一九〇〇）、市電、別大電車が全国で五番目に走った。京都が一番目である。

文豪、森鷗外が明治三十三年（一九〇〇）に豊後の別大電車に初乗り、小倉十二師団軍医部長として大分県を視察。

3 西法寺と松尾芭蕉句碑

浄土真宗本願寺派、西本願寺系、鐘楼付き山門と本堂は江戸時代の建築。山門は釘を使用していない。本堂は平成になつてから瓦を葺き替えている。

池の左側には松尾芭蕉の句碑が建てられている。

「古池や かはず飛び込む 水の音」芭蕉

句碑は乙巳きのとよ、弘化二年（一八四五）、江戸時代後期の建立である。

この句碑は「別府今昔」によると江戸の末期、豪商、荒金たばこ屋の荒金呉石（儀八郎）が寄贈した。

句碑の文字は櫻井梅室書と言われている。

蛙が止まっている灯籠の建立時期は「甲寅きのえとら、安政元年、一八五四）八月、江戸末期、日米和親条約が結ばれている時期である。蛙の灯籠の建設時期は、芭蕉句碑の建立から九年後である。灯籠正面の文字は異体文字のため普通の漢和辞典では読めないが意味はおおよそ分かる。

本堂手前左側の石灯籠には蛙が止まっている。

別府市内には芭蕉の句碑が四つ建立されている。

松尾芭蕉は豊後別府には来ていない。江戸時代、別府には庄屋やお寺の和尚達の間で俳句が盛んだった。特に西法寺の蘭谷和尚らんくの所には当時の文化人が集まってきた。蘭谷和尚の師匠に当たる日田の広瀬淡窓も数回別府を訪れている。

4 松下金物店

創業は市内浜脇で明治三十五年（一九〇二）、昭和四年（一九二九）に浜脇から流川通りに移住、建築した。建物は看板形式建築、スクラッチ（ひっかき）・タイル、旧帝国ホテルにも使用されていた。なお、旧別府市公会堂、現別府市中央公民館にもスクラッチタイルが使用されている。関東大震災、大正十二年（一九二三）九月一日、その後、東京では看板形式建築が流行した。

5 割烹文楽の跡

流川通りの松下金物店の左横には「割烹文楽」があった。太平洋戦争が行われていた昭和十六年（一九四一）から終戦の二十年（一九四五）ころの間、織田作之助が三回ほど大阪から別府の姉夫婦、山市千代、虎次が経営している別府の流川通りの「割烹文楽」を訪れている。割烹文楽は流川通り

の松下金物店の左隣にあった。千代は織田作之助の三人の姉のうち二番目である。

6 織田作之助

織田 作之助（おださくのすけ、一九一三年（大正二年）十月二十六日生まれ—一九四七年（昭和二十二年）一月十日死去。）東京にて取材中に咯血して死去した。日本の小説家。通称「織田作（おださく）」。享年三十五歳。

織田作之助は昭和十六年（一九四一）から昭和二十年（一九四五）の戦時中、三回ほど別府の姉夫婦の「割烹文楽」、別府市流川通りを訪れている。

「別府の流川通りは大阪の道頓堀である」という内容の短編小説を残している。山市千代、虎次（とらじ、虎次）、姉夫婦をモデルに「夫婦善哉」を発表して文学賞を受賞している。最近、『夫婦善哉』の続編の原稿が発見され、小説「夫婦善哉、完全版」が出版された。それには別府が舞台となっている。

二〇一三年（平成二十五）にはNHK大阪放送局から森山未来、尾野真智子主演の「夫婦善哉」がテレビで放送された。最終回、第四回目はセット撮影ながら別府が舞台となっている。

7 山市千代、席次（とらじ、虎次）、織田作之介の姉夫婦

織田作之介には三人の姉がいた。中の姉夫婦、千代・席次が大阪から別府に来て、流川通りに「割烹文楽」という店を開いている。姉夫婦は共に文楽、浄瑠璃が趣味で、得意でもあった。平野史料館の前、現在の中華料理店「一二三」も以前は山市千代、虎次夫婦が経営していた店である。小説「夫婦善哉」が有名になったので、店の名前も「夫婦善哉」と付けていた。その後、野口元町の「割烹旅館千成」の北側の駐車場付近に「旅館文楽荘」を開いていた。以前、この場所は白杵出身で書家でもあり、以前海軍にも勤務していた白須心華が住んでいた。

別府市野口中中央温泉（野口中町十二）には「心華」の署名入りの看板が掲げられている。

8 伊能忠敬（ただたか）測量の石碑

文化七年（一八一〇年、江戸時代後期の前期）二月十一日、別府の海岸を測量している。江戸日本橋から二六三里（一、〇二六km）、庄屋宅に宿泊した。この付近に庄屋及び高札場が建っていた。グループを二班から三班に分け、時間をずらして測量している。現在から、およそ二〇〇年前の

ことである。日本で初めて正確な日本地図を作成している。伊能忠敬の測量した日本地図は大、中、小図がある。

福岡県北九州市の紫川河畔にあるゼンリンの本社ビルには社長が収集した古地図の展示場がある。その部屋には伊能忠敬の日本中地図が床に印刷されている。住宅地図「ゼンリン」の発祥の地は別府市千代町九―二六である。以前、この建物は後理髪店で、二階の六畳一間がゼンリンの発祥の場所である。現在の本社ビルは北九州市に移転している。



9 不老軒、楠店

小説家・山口 瞳（ひとみ・本名同じ、男性）も好んだというこの店の「かるかん」は、昭和五年（一九三〇）の創業以来、変わらぬ味を保っている。天然の自然薯と米の粉を混ぜ合わせた粘りのある生地と手作り餡が、この店ならではのもっちりとした食感と独自の味わいを作り出す。伝統を守りながら一つひとつ丁寧に手作りする「かるかん」は、抹茶と白の2種類。

料金…一口羊羹十七個入四二〇円。

10 山口 瞳

山口 瞳（やまぐち・ひとみ、本名同じ、男性、一九二六年（大正十五）十一月三日生まれ—一九九五年（平成七）八月三十日死去）は、日本の男性作家、エッセイスト。享年七十歳。妹で日本舞踊家の花柳若奈（本名…栄）はジェリー伊藤の妻。作家で映画評論家の山口正介は息子。代表作は、『週刊新潮』に昭和三十八年（一九六三）から三十一年間、延べ一、六一四回、死去まで一度も穴を開けることなく連載を続けたコラム・日記の『男性自身』シリーズ、自らの両親の生い立ちを題材とした『血族』（第二十七回菊池寛賞受賞）、『家族』など。競馬や将棋、野球に造詣が深く、全国の地方競馬場を踏破した『草競馬流浪記』、プロ棋士と駒落ちで対戦した記録『山口瞳血涙十番勝負』、プロ野球から草野球まで、野球に関するエッセイをまとめた『草野球必勝法』などの著書もある。不老軒にしばしば訪れて、かるかん、串団子、石垣餅を好んで注文していた。死去後、遺族から文集や画集を送ってきている。

11 ミヤコ蝶々

ミヤコ蝶々（ミヤコちょうちょう、女性、一九二〇年（大正九）七月六日生まれ—二〇〇〇年（平成十二）十月十二日死去）は、日本の女優、漫才師。本名、日向鈴子（ひゅうがすずこ）。長らく上方漫才・喜劇界をリードした関西を代表するコメディアンである。享年八十一歳。夫は南都雄二。通称「なんという字」という説がある。蝶々さんは生存中、しばしば別府の不老軒を訪れていて、当店の「かるかん」を好んでいた。

12 南都雄二

南都雄二（なんとゆうじ、本名…吉村朝治（よしむらちやうじ）、一九二四年（大正十三）四月二十六日、生まれ—一九七三年（昭和四十八）三月十九日死去）は上方の漫才師、俳優。大阪市の生まれ。大阪電機学校卒業。愛称は「雄さん」。夜遊び、夜の豪遊は語り草になっており「キタの雄二（南都雄二）かミナミのまこと（藤田まこと）、東西南北、藤山寛美」といわれるほどであった。享年五十歳。

13 アホロートル

吉行淳之介の小説『珍獣戯話』『めずらしい動物のお話』に出てくる。メキシコの正式の名称。日本では通称「ウーパールーパー」と言われている。以前は貸席「すずや」であった。赤線禁止後、アパートとなり、その後軽食喫茶となった。軽食喫茶のご主人が小説を読むのを趣味としていて、吉行淳之介の『珍獣戯話』からとった「アホロートル」、日本名「ウーパールーパー」を店の名前に利用している。二階の和室、四畳半には「すずや」表示ののれん、ちゃぶ台、木製で縁ゆかりに湯飲み茶碗が置ける四角の火鉢、床の間、押し入れ等がある。

14 浅利良道（りょうどう）、生誕の地、歌碑

（秋葉町一丁目の秋葉神社前）

「春や良し 宵や暖しと ゆるゆると

歩める人は 皆湯治客」 良道

明治三十年（一八九七）

十二月七日、別府市生まれ、昭和五十二年（一九七七）四月、別府国立病院にて死去。



享年八十一歳。晩年は湯布院や別府市の鉄輪に住んでいた。

大分合同新聞の和歌の選定を勤めていた。

由布市湯布院の臨濟宗仏山寺にある浅利良道の歌碑

「この郷をかこみてよろふ高山も

低山もなべて雪降りつもる」 良道

15 浅利喜兵衛と鳥居

秋葉神社の鳥居を寄贈している。浅利良道の父親、大正四年（一九一五）五月、別府の秋葉神社の鳥居を寄進している。醸造業を営む豪商だった。神社の前が浅利良道の生誕地、「満足屋」があった場所である。

16 丸山待子生誕の場所、歌碑

「薄氷うすひのとけてあわだつ池水の

にこりめにたつ 春日となりぬ」 待子。

二十九歳で夫と死別後、実家の河村「小松屋」に帰り、禅と和歌の道へ、昭和三年（一九二八）浅利良道、瓜生鉄雄（大分市勢家町二、威徳寺住職、歌人）等と『大分歌人』を創刊。野口雨情、与謝野晶子、片多徳郎（画人）等文人、歌人、画人、政財界人が訪れる「文化サロン」だった。昔の別府銀行、

別府信用組合の跡。

小松屋は関西方面へ豊表を運び帰途は油を別府へ運ぶ回船業で財をなし、信用組合を設立した。ここは別府の財界人の社交場であり、大正から昭和にかけて、文化人のサロンとなっていた。野口雨情、与謝野晶子なども訪れたことで知られる。

「寒朝を 温泉に足浸す 母上の

七十に近き 齢をおもう」 丸山待子

紙屋温泉前（千代町十一）に掲示されている。

河村マチ、結婚して丸山マチ、丸山待子という雅号で短歌を趣味としていた。明治二十六年（一八九三）生まれ、昭和十六年（一九四一）死去。享年四十九歳。

夫、丸山篤（あつし）、報知新聞記者、大分市で英語を教える。

大分市津守、滝尾の丸山家の養父母のもとで暮らしていたが、養父母が死去、夫も死去したため、実家の河村家（別府市末広町二）に戻った。ここでは短歌及び座禅（大分市金池の万寿寺）に生き甲斐を見いだしていた。別府の末広町の河

村家では文人、画人が集まり、文化サロンを呈していた。野口雨情が学校の先生達を集めて音楽会を開いていた。

丸山篤、待子夫婦一緒の墓は大分市金池の万寿寺境内にある。

17 秋吉方子（かたこ）

河村マチ、待子の妹。秋吉良聞（良文）夫人。ホトトギス九州女流同人第一号。秋吉良文、良聞は内科医。夫婦共に俳句を嗜む。しばしば、高浜虚子が別府北浜の秋吉邸を訪れている。河村カタ、結婚後、秋吉カタ、方子。

18 竹久夢二、笠井彦乃、療養の地、中田医院

彦乃が入院していた。夢二、明治十七年（一八八四）生まれ、昭和九年（一九三四）死去、享年五十一歳。岡山県生まれ。大正七年（一九一八）に長崎への旅行の途次、来別する。笠井彦乃、十一歳年下。

彦乃は別府で発病し、中田医院に入院。大正九年（一九二〇）一月十六日、二十五歳で東京にて死去。中田医院はその後、河野小児科医院から吉井医院となり、現在は駐車場となっている。河野小児科医院は現在、石垣地区で開業している。

19 笠井彦乃

明治二十九年（一八九六）三月二十六日、生まれ—大正九年（一九二〇）一月十六日、死去。山梨県生まれ。

女子美術学校（今の女子美術大学）卒業

竹久夢二が最も愛した女性：

彦乃は山梨県南巨摩郡西島村（現・身延町西島）で生まれ、日本橋にあった宮内庁御用達の紙問屋の娘として育ちました。十三歳の時に日本女子大学附属高等女学校に入学。夢二のファンであり、「港屋絵草子店」を訪問したことがきっかけで夢二との交際が始まり、夢二の勧めで女子美術学校（女子美）に入学しました。

竹久夢二は彦乃との交際が始まった頃、戸籍上唯一妻となった女性である岸たまきと別れ、京都に移り住みました。彦乃にはこの時既に父が決めた許嫁がいたため、夢二との交際に対して反対であったことは言うまでもありません。

それでも彦乃と夢二のお互いを思う気持ちは萎えることなく、彦乃は父を欺き京都へ向かいました。彦乃はこうして京都で夢二としばらく同棲しましたが、大正七年彦乃が九州旅

行中の夢二を追う途中、別府温泉で当時不治の病と言われた結核を発病してしまいます。京都まで彦乃を見舞いにきた父は、入院先に訪ねてきた夢二と鉢合わせした際、夢二を階段から一度ならず二度も突き落とし、彦乃の前に立ちふさがったことがあるとのことでした。

その後彦乃は父の手によって東京に連れ戻され、御茶ノ水順天堂医院に入院。大正九年（一九二〇）一月十六日に二十三歳で亡くなりました。この時、夢二は彦乃の父に面会を許されず、彦乃の死後しばらくショックから立ち直れなかったそうです。

20 流川文学碑

寿温泉横に建立されている。

『流川文学』発祥の地。

名作『夫婦善哉』で知られる織田作之助は『雪の夜』『湯の町』や『怖るべき女』未完、など流川界隈を作品の舞台にしている。徳田秋声も『西の旅』で描写し、明治、大正、昭和初期には、



多くの文人墨客は別府温泉を訪れ、流川界隈を作品に残している。

徳田 秋声（徳田 秋聲、とくだしゅうせい、男性、一八七二年二月一日（明治四年十二月二十三日）—一九四三年（昭和十八）十一月十八日）は、石川県金沢市生まれの小説家である。本名は末雄。

「雪の夜」より、織田作之助

大晦日に雪が降った。朝から降り出して、大阪から船の着く頃にはしとしと牡丹雪だった。夜になってもやまなかつた。毎年多くて二度、それも寒にはいつてから降るのが普通なのだ。いったいが温い土地である。こんなことは珍しいと、温泉宿の女中は客に語った。往來のはげしい流川通でさえ一寸も積りました。大晦日にこれでは露天の商人あきんどがかわいそうだと、女中は赤い手をこすった。入湯客はいずれも温泉場の正月をすごしに来て良い身分である。せめて降りやんでくれたらと、客を湯殿に案内したついでに帳場の窓から流川通を覗いてみて、若い女中は来年の暦を買いそこねてしまった。毎年大晦日の晩、給金をもらってから運勢づきの暦を買いに出る。が、今夜は例年の暦屋も出ていない。雪は重く、降

りやまなかつた。窓を閉めて、おお、寒む。なんとなく諦めた顔になった。注連縄屋も蜜柑屋も出ていなかった。似顔絵描き、粘土彫刻屋は今夜はどうしているだろうか。

しかし、さすがに流川通である。雪の下は都会めかしたアスファルトで、その上を昼間は走る亀ノ井バスの女車掌が言うとおりに「別府の道頓堀でございます」から、土産物屋、洋品屋、飲食店など殆んど軒並みに皎々と明るかつた。

21 塩月堂、

明治四十三年（一九一〇）の創業。ゆずまん、ゆずようかん、ざぼん漬け、ワイン漬け等がある。昭和天皇が別府にお見えの際、友永の「こしあんぱん」と塩月堂の「ゆず万」を好まれたといわれている。

別府では「ざぼん」、鹿児島では中国人の名前から「文旦ぼんたん」という。

22 食堂「たけや」

昭和四十一年（一九六六）竹瓦温泉前で営業開始。

「民子の弁当」がコンクール二位となって人気がある。前日に予約する必要がある。

竹瓦かいわい
路地裏散歩!!

